

少女の涙をだれが伝えるのか

— ミャンマーで倒れた長井健司さん —



2007年9月28日、ミャンマーでデモを取材中の長井健司さんが銃で撃たれて死亡した。地面にあおむけに倒れてからもビデオカメラを右手にかざし、撮影を続けようとする長井さんの写真が全国の新聞の一面にのった。

この長井さんは、愛媛の出身である。子どもの時は目立たない大人しい少年であったが、みんなが尻ごみするようなことでも、すすんでやってのける強い一面があった。

長井さんは、報道記者となっても、他の記者が身の危険を感じて、ちゅうちょするような紛争地帯にもいち早く出かけて行った。「だれかが行かなければ、だれかが行かなくてはならない」の考え方で、北朝鮮の国境、アフガニスタン、パレスチナのガザ地区、イラクなど命がけの取材を続けていた。

一方、長井さんは、弱い立場の人たち、特に恵まれない子どもたちへの温かいやさしさがあった。

長井さんは報道記者としての仕事をしながら、1991年ころより「イラクの子供たちを救う会」のお手伝いをすすんで行ってきた。尿がもれるという生まれつきの障害を持ったイラク人少年サード君が日本の大学



日本で手術を受け、開戦直前に帰国したサード・ムハモンド君（左）と長井健司さん。手前は長井さんが届けた紙おむつ＝2003年4月12日（現地時間）、イラク・スワイラ郊外にある疎開先（久山宗彦さん提供）

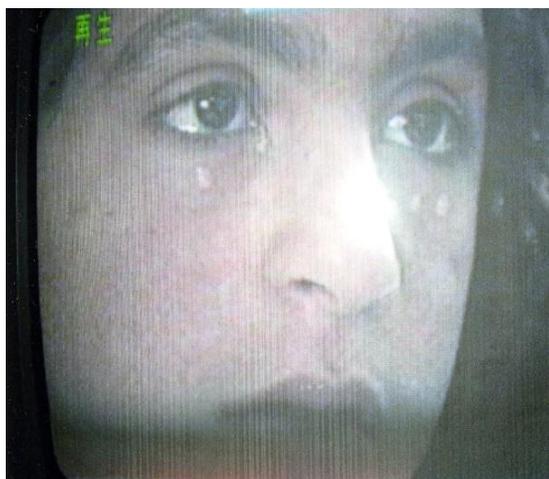
で三回手術を行い、イラク戦争が始まる前に帰国した。手術後のため一日に3回おむつを交換しなければならない。しかし、イラク戦争が始まりおむつがなくなり大変困っていた。そのことをイラク戦争を取材中に聞いた長井さんは、早速隣の国のヨルダンへ行き、4か月分のおむつを買った。そして、戦争で危険極まりない状況の中をバクダットの郊外100キロのところに避難しているサード君に届けた。そのあとも、折りをみてサード君を見舞いにたずね励ますとともに、サード君の様子を「救う会」に報告していた。

2001年に放映されたNHKの特集「— 急増するエイズ孤児 — タイ7500人の子どもたち」は長井さんが中心になって取材し、報告したものである。タイでは1990年代エイズに100万人が感染、30万人が死亡するという深刻な状況になっていた。そのため7500人がエイズ孤児となった。

タイ北部のナンプレー村にある施設では、1999年に22人のエイズ孤児を預かり世話をしていた。その中に双子の姉妹オイちゃん和アイちゃんがいた。最初は元気であどけない二人であったが、二人とも、けんめいな治療のかいもなくエイズの病状が進行し、亡くなった。

このようにして、2年間で8人の孤児が次々と死亡するという痛ましい現実を長井さんは取材し続けた。これらの子どもたちをなんとか助けることができないかという長井さんの思いが伝わってくるような映像である。

この番組の最後のまとめで、長井さんは、やがてエイズの治療薬が開発されることを期待したのであろう「子どもたちを死なせてはならない。子どもたちをいかに長生きさせるか。考えて考えて、立ち止まってはならない…」と述べている。



また、2006年、パレスチナのガザ地区で、一家8人が海水浴を楽しんでいるところにミサイル攻撃があり、一瞬にして7人が犠牲となった。長井さんは、ミサイル攻撃の続く恐怖の中、一人生き残った少女フダちゃんの取材を行った。「少女の涙をだれが伝えるのか」「自分が引き揚げたら伝えるものがだれもいなくなってしまう」

《一人生き残った少女フダちゃん》

このように長井さんは命がけで世界の紛争地域の真相を伝えるとともに、恵まれない

子どもたちにひたむきなやさしさを注いできた。

長井さんが銃撃された時に撮影していたビデオカメラは、いまだに返還^{へんかん}されていない。ミャンマー政府に対して、長井さんをうった犯人の処罰^{しょばつ}とビデオカメラの返還^{へんかん}を求める街頭署名活動^{がいでうしよめい}が今治で、松山で、東京で行われている。

27日、ミャンマーのヤンゴンで、警官に追われて逃げる市民を倒れながらカメラで撮影する長井健司さん（ロイター＝共同）



お世話になった方

A P F 通信社 代表 山路 徹